

平成22年5月15日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号： 19520376
 研究課題名 (和文) 海岸ツィムシアン語の自然談話テキストの公刊
 研究課題名 (英文) Compilation of Coast Tsimshian texts
 研究代表者
 笹間 史子 (SASAMA FUMIKO)
 大阪学院大学・情報学部・准教授
 研究者番号： 60330114

研究成果の概要 (和文)：本研究は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州で話される北米先住民諸語の一つ、海岸ツィムシアン語の自然談話テキストを整理し、言語学および教育的な目的に使えるように提供するものである。現地調査で収集した日常的な話題についてのテキストをテープから書きおこし、正書法および音素表記を用いて表記、これに2種類のグロス、英訳をつけた。グロスの理解を助けるための文法ノートと、音声資料も添えている。

研究成果の概要 (英文)： This study aims to compile natural discourse data of Coast Tsimshian, one of the First Nations' languages spoken in Canada, to be used for both linguistic and educational purposes. The texts were originally collected from a proficient speaker of this language who passed away a few years ago. She recorded stories about the latest incidents around her in daily sessions. The texts were transcribed, translated, checked by another speaker, and then provided with glosses. The texts are presented in the following form: orthographical transcriptions, phonemic transcriptions, morpheme-by-morpheme glosses, word-by-word (rough) glosses, and English translations. They are accompanied by an appendix of grammatical notes and sound recordings.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：海岸ツィムシアン語、自然談話テキスト、北米先住民諸語

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの海岸ツィムシアン語テキスト
- 1

現在手に入る、まとまった量の海岸ツィムシアン語のテキストとしては、ウィリアム・ベイノンによる1920年代から1930年代にかけてのマニュスクリプトが存在するのみであり、これが20世紀後半に入ってからさまざまな機会に（ときにその表記を現行の正書法に直したかたちで）研究・教育に利用されてきた。ベイノンのテキストは、量的にきわめて充実しており、海岸ツィムシアン語が十分な活力を有していた時代の貴重な資料であることは間違いない。しかしながら、ベイノンのテキストは、言語学的な研究に用いるにも学習者が利用するにもさまざまな問題を含んでいた。

まず、表記が音韻的というよりは音声的であり、その音声観察がしばしば不正確だったことがあげられる。北米北西海岸の諸言語に一般的な軟口蓋音と口蓋垂音の区別、破裂音・破擦音の喉頭化などが正確に表記されていない箇所が見受けられる。

また、ベイノンのテキストは、トリックスターを主人公とする物語や、部族の移動等を題材にした歴史物語等を集めたもので、そこで用いられている海岸ツィムシアン語と現在のそれとの間には、さまざまな語彙的・文法的な差異が観察される。これらの差違ゆえに、ベイノンのテキストは、現在の海岸ツィムシアン語の記述に用いるには適さず、また、父母や祖父母の話す言語を学ぼうとする学習者向けの資料とするにも適さない。

さらに、ベイノンのテキストについてのグロスは、複統合的性格をもつこの言語の文法的な情報を得られるようなものとなっていない。

ベイノンのテキストが図書館、教育機関等にマイクロフィッシュの形で保管されていることも、一般の利用を困難なものにしている。

(2) これまでの海岸ツィムシアン語テキスト
- 2

1960年代終わりに言語学者により海岸ツィムシアン語の正書法が整備され、地域の学校での教育に用いられるようになった。1990年代以降には、現地の大学分校でのクラスにおいて正書法を用いたテキストが利用されるようになり、また、正書法を用いた絵本等も作成された。しかし量的にきわめて限られていたこと、グロス等テキストの理解にとって助けになるような情報がないこと、相変わらずベイノンによるテキストの再利用が多

く、語彙的・文法的に現在の海岸ツィムシアン語と異なる点が見られるものであった。

また、ごく最近になって20世紀後半に録音されたテキストを書きおこす試みがなされているが、量ごく限られているうえ、語っている内容が「物語」であることから、現在一般に話されている海岸ツィムシアン語とは多少異なるスタイルが使われている。

(3) 海岸ツィムシアン語のおかれた状況

多くの北米先住民諸語同様、海岸ツィムシアン語は、いわゆる「消滅の危機に瀕した言語」である。とりわけ北米北西海岸には危機度の高い言語が分布しており、海岸ツィムシアン語も例外ではない。流暢な話者のほとんどは70代以上であり、すでに話者数が500人、200人などと言われてからしばらくたつ。少し前まで地域での海岸ツィムシアン語教育にたずさわっていた年輩の話者たちは、ここ10年ほどの間に次々とこの世を去っている。海岸ツィムシアン語の自然談話テキストを収集するにも、話者の協力を得てそれを整理するにも、最後の時期を迎えている。

2. 研究の目的

(1) 新たな海岸ツィムシアン語テキストの提供

上に述べたベイノンを別にすれば、これまで海岸ツィムシアン語のテキストはきわめて限られたものしかなかった。本研究は、新たな海岸ツィムシアン語テキストを提供しようとするものである。現在の海岸ツィムシアン語による、ある程度まとまった量のテキストとしては初めてのものとなる。

(2) 現在の文法・語彙による、日常的な話題についてのテキスト

本研究では、現在の話者たちが日常用いている文法・語彙を用いた、話者を取りまく日々のできごとを題材とするテキストを扱う。こうしたテキストは現在の海岸ツィムシアン語のさまざまな性質を知るのに役にたつのみならず、学習者の親や祖父母が使っている文法・語彙による身近な話題についてのテキストであることから、学習者にとっても利用しやすいものであろうと考える。

(3) 正書法・音素表記両方の使用

本研究では、正書法と音素表記の両方を用いてテキストを表記することにより、言語学的研究にも、学習者にも利用できるものをめざす。

(4) 語彙・文法情報の収集

現地調査においては、語彙・文法に関する情報をエリシテーションで得ることが少なくない。しかしながら、テキストはエリシテーションでなかなか得られない語彙・文法情報を提供してくれる。今後新たに気づいたさまざまな文法特徴を解明していく際にも重要な資料となると考えられる。

(5) 音声資料の提供

本研究では、文字化されたテキストに音声資料も添える。音声資料は、現在の学習者にとって有用であるのみならず、海岸ツィムシアン語の単音さらにはプロソディーの研究にとっての利用も期待できる。

3. 研究の方法

本研究では、次のような手順でテキストのとりまとめをおこなった。

- ・調査で得られた自然談話テキストをテープから書きおこす。
- ・英訳をつける。
- ・書きおこしたテキストおよび英訳をパソコンに入力する。
- ・正書法および英訳を話者に提示し、共にテープを聴きながらこれらをチェックしてもらう。
- ・未確認の語彙項目・文法項目に関して、その発音・意味・機能等を確認する。
- ・入力したテキストを修正するとともに、グロスをつける。

各年度、春期または夏期に、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州プリンスルパートにおいて、1ヶ月弱の現地調査をおこなった。現地調査の大半は、テキストのテープを話者とともに聴き、書きおこした海岸ツィムシアン語テキストとその英訳をチェックし、未確認の語彙項目等についての情報を収集することに費やした。

4. 研究成果

(1) 現在用いられている文法・語彙による、自然談話テキスト

本研究の成果は、Sm'algyax Texts にまとめられた。これは、これまでほとんど集められてこなかった現在の海岸ツィムシアン語の自然談話テキストにグロス・英訳等をつけたものである。

このテキストの構成は以下のとおりである。

- ・海岸ツィムシアン語テキスト（正書法）
- ・同（音素表記）
- ・同（形態素境界に関する情報を含む）
- ・形態素ごとのグロス
- ・語ごとのグロス
- ・英訳

集められたテキストは、現在の話者たち（海岸ツィムシアン語を母語とし、幼少期からほぼずっと日常的に海岸ツィムシアン語を用いてきた年配の話者たち）が日常用いている文法・語彙を用いたテキストであり、話者をとりまく日々のできごとを題材としたものである。当然、何かを海岸ツィムシアン語に訳したものではなく、話者が日々のセッションの中で自発的に語った、「語りによる日記」とも呼べるようなものである。学習者の親や祖父母が使っている文法・語彙による身近な話題についてのテキストは、学習者にとっても利用しやすい資料となろう。

(2) 正書法・音素表記両方の使用

本研究によるテキストでは、表記に正書法と音素表記の両方を用いている。これまでの海岸ツィムシアン語に関する論文・教材等は、本研究代表者によるものを含め、音素表記のみ、あるいは正書法のみで書かれていた。音素表記で書かれたものは研究者のみを対象としており、話者・学習者たちがこれを利用することは困難であった。一方、正書法が音韻と正確に対応していないこと、そしてコミュニティー（または個人）による正書法使用のばらつきが少なからずあることから、正書法で書かれた資料は必ずしも言語学的利用に適したものとはなっていなかった。

本研究では正書法と音素表記の両方を使用し、正書法使用においてはある程度慣用も参考にしつつ、できるだけ音韻に添うような一貫した表記を目指した。

(3) 語彙・文法情報の収集

テキストに現れるさまざまな語彙項目、文法項目は、エリシテーションによる調査だけ

ではなかなか得られない情報を提供してくれた。こうした項目については、現地調査時に時間のゆるす範囲で情報を収集した。

エリシテーションでは得られなかった語彙にはどのようなものがあり、その意味・用法はどのようなものであるか。これまで未確認であった派生接辞にはどのようなものがあり、その意味・機能は何であるか。どのような派生接辞と語根の組み合わせがみられるのか。必ずしも義務的でない重複形の実際の使用はどのようなものであるのか。前置詞が（意味的に結びついた後続の語ではなく）先行する語と音韻的に結びつく現象はどのような場合にみられるのか、などである。

こうした語彙・文法情報の一部はテキストにつけたグロスや、テキスト末に付した文法ノートに反映された。

本研究で得られた自然談話テキストは、今後形態統語的な研究をしていくうえでも、重要な資料となると思われる。さまざまな項目の機能を明らかにするためには、談話の流れの中でのふるまいを検討することがしばしば不可欠であるからである。

(4) 音声資料の提供

本研究によるテキストには、音声資料を付けている。個人情報を含むものであることから、すべてのテキストの音声を含めることはできなかったが、音声資料をつけることで、より学習の役に立つものになったと考える。資料の保存という意味でも、意義あることであろう。

音声資料を付すことで、海岸ツィムシアン語の単音はもとより、プロソディーの研究にとっての利用も期待できる。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 笹間史子、海岸ツィムシアン語における前置詞の機能、大阪学院大学外国語論集、査読有、第58,59号、2009、1-18

② 笹間史子、海岸ツィムシアン語、梶茂樹・中島由美・林徹編、事典世界のことば141、査読無、2009、552-555

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹間史子（大阪学院大学・情報学部・准教授）

研究者番号：60330114

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし